第９回　埼玉輸血フォーラム

開会あいさつ

埼玉県合同輸血療法委員会　代表世話人　　池淵　研二

みなさんこんにちは

本日は土曜日の午後、おくつろぎのところ埼玉会館まで埼玉輸血フォーラムにご出席いただきまして誠にありがとうございます。実り多い講演を用意しておりますので、きっと来て良かったなと思っていただけると期待しております。昨年は大阪府血液センターの谷先生からiPS細胞の今後の血液事業における役割について非常に先駆的なお話をいただきました。北海道ブロック血液センターの高本先生からは日本の輸血事情ということで、いままで輸血医学と血液事業がたどってきた経緯を、最近の若い方にも分かりやすく丹念に掘り起こして解説していただきました。私は昭和53年に研修を始めましたが、当時は輸血を行うと今では死語となっているnon A non B肝炎が約10数パーセントの率で発症するという時代でした。当時はB型肝炎の検査以外はなかったので、その他についてほとんど検査できなかったのです。その後､今に至るまで検査の高感度化が進み、製剤に関しても血液センターで保管前に白血球除去をおこなうようになり、採血時に初流血除去を実施することで細菌感染予防効率が高まり、洗浄血小板の登場が実現し、検査と製剤ともに非常に安全性が高くなってきたことを高本先生に講演いただきました。このように、検査、製剤等は革新的に進歩してきましたが、それを受付ける現場、人、設備、施設について、もう一度クローズアップさせていくべきであろうと考えて今回のフォーラムのテーマに繋がっていったと思います。

まず初めは、埼玉県の中でどのような医療機関がどのように輸血を実施しているのか、防衛医科大学校病院の佐藤先生にアンケート調査をしてもらい発表していただくことになりました。佐藤先生には大規模や中小規模の施設向けのアンケート調査で大変苦労されたと思いますが、今後も埼玉県内医療機関の状況を把握していきたいと考えております。それから、医療機関が受審する病院機能評価や保健所の医療機関立入検査において、常の重要でターゲットとなる部門として医療安全があります。人的なミス、操作ミス等々について、輸血や医療の領域について安全な医療を実現させようと取り組まれている自治医科大学付属さいたま医療センターの遠山先生と亀森看護師長に来ていただいております。それから、大きな病院では普通の輸血業務かも知れませんが、小規模、中規模施設で検査技師がいない場合、どのようにクロスマッチ検査をおこなっているか、血液製剤をどのように保管しているか、輸血実施中に患者の体調管理をどうしているのか、など中小規模施設での輸血の実態に詳しい東京都立墨東病院の藤田先生をお招きしました。そのような施設での安全な輸血のサポート体制、さらに在宅輸血についてご紹介していただく予定です。本日参加していただいた埼玉県で輸血に興味をもっている方や、輸血を実践で行なっている方に非常に大きな情報を提供していただけると思っております。ということで、５時までとても有意義な講演会となりますことを願っております。どうもありがとうございます。